



////////////////////////////////////

日本植物分類学会 ニュースレター

////////////////////////////////////

No. 69

May 2018

今号のトピックス

会長および評議員選挙の投票締切は 7/13 です→ 2 ページ
 今年の野外研修会は 9/8 ~ 9/10 山形県です→ 17 ページ
 東アジア国際植物分類学シンポジウム 2018 もお見逃しなく→ 18 ページ

目 次

会長および評議員選挙公示	2
評議員会からの会長候補者の推薦	3
諸報告	
2018 年度日本植物分類学会の第 17 回大会（金沢）の報告	3
2018 年度大会発表賞の報告	5
2018 年度大会発表賞受賞者喜びの声	6
2018 年度第 1 回評議員会議事抄録	7
2018 年度総会議事抄録	9
2018 年度事業計画および予算	11
IUCN レッドリスト評価者トレーニングワークショップに参加して	14
2017 年に到着した交換図書一覧	15
お知らせ	
2018 年度日本植物分類学会野外研修会のお知らせ	17
東アジア国際植物分類学シンポジウム 2018 のご案内	18
日本植物分類学会第 18 回大会（八王子）のお知らせ	19
庶務からのお願い	19
書評	20
2019 ~ 2020 年度日本植物分類学会役員選挙被選挙人名簿	21
会員消息	24

会長および評議員選挙公示

選挙管理委員長 岡崎 純子

2018年12月末をもって、2017-2018年度の役員が任期満了となります。これにともない、次期会長および評議員の選挙を、学会会則12条および役員等の選出についての細則に従い、下記の通り行います。

この選挙で選出される会長および評議員には、学会運営や活動の舵取りをしていただくこととなります。大切な選挙ですので、学会員の権利である一票をぜひ投じて頂きますよう、会員のみなさまをお願いいたします。投票の締め切りは2018年7月13日（金）です。

なお、会則第13条3で定められているように、役員には在任期間に関する制限があります。今回の選挙では、以下の方に評議員の被選挙権がありません。投票用紙に記名されても無効になりますのでご注意ください。

評議員の被選挙権なし（五十音順）：海老原 淳，岡崎 純子，黒沢 高秀，坪田 博美，布施 静香，
米倉 浩司

また、今回役員等の選出についての細則の第2条にもとづき、評議員会から会長候補者として以下の3名の方が推薦されています。なお、評議員会推薦の会長候補者以外の被選挙権をもつ会員に投票されてもかまいません。

評議員会推薦の会長候補者（五十音順）：伊藤 元己，高宮 正之，村上 哲明

選挙実施細目

1. 投票締切：2018年7月13日（金）（当日消印のものまで有効）
2. 投票用紙：投票には、ニュースレター本号に同封されている会長選挙投票用紙（水色）と評議員選挙投票用紙（黄色）を使用してください。それ以外の用紙を用いた場合、無効となります。
3. 記入方法：ニュースレター本号の選挙人名簿をご覧になり、会長選挙投票用紙（水色）に会長候補者1名を、評議員選挙投票用紙（黄色）に評議員候補者8名以内をそれぞれ記入してください。同姓あるいはよく似た名前の方がおられます。投票に当たっては選挙人名簿を参照の上、氏名を略さずに記入してください。規定数を超過して候補者名を書かれた場合は、その票自体が無効となります。また、会員以外の候補者名を書かれた場合は、会員以外の部分のみが無効となります。
4. 投票用紙の郵送：記入後、投票用紙を二つに折り、同封の返送用封筒に入れて郵送してください。封筒には、ご自分の住所と氏名を必ず記入してください。封筒が同封されていないか、あるいは紛失した場合には、「会長・評議員選挙投票用紙在中」と朱書きした任意の封筒で、下記の投票用紙送付先まで郵送してください。その場合、切手代はご負担ください。なお、投票用紙の再発行はいたしません。
5. 開票：2018年7月18日（水）に票を開票します。開票場所は大阪教育大学を予定しています。会員2名以上の立ち会いのもとに開票します。会員は開票に立ち会うことができます。立ち会いを希望される場合は、開票日時・場所の詳細を追って連絡いたしますので、選挙管理委員長までご連絡ください。
6. その他、不明な点などございましたら下記宛ご連絡ください。

投票用紙送付先および連絡先

〒582-8582

大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1 大阪教育大学・教員養成課程・理科教育講座
日本植物分類学会選挙管理委員長 岡崎純子

Tel: 072-978-3390, e-mail: okazaki@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

評議員からの会長候補者の推薦

評議員 海老原 淳

本学会では、役員等の選出についての細則第2条に「評議員会は若干名の会長候補を推薦することができる」と定めてあります。そこで、評議員会より下記の通り会長候補者を3名推薦します。なお、評議員会からの推薦は、学会員皆さんの推薦候補者以外への投票を妨げるものではありません。どうぞ熟考の上、評議員会からの推薦候補である・ないにかかわらず、最も適任と思われる方に大切な一票を投じてくださるようお願いいたします。

推薦する会長候補者（五十音順・敬称略）：伊藤 元己、高宮 正之、村上 哲明

諸報告

2018年度日本植物分類学会第17回大会（金沢）の報告

第17回大会実行委員長 山田 敏弘

1) 概要

日本植物分類学会第17回大会が2018年3月7日（水）から11日（日）の日程で、金沢市にて開催されました。参加総数（シンポジウムのみ参加を除く）は250名で、内訳は一般174名（うち当日33名）、学生76名（同4名）でした。金沢歌劇座で行われた研究発表では、53題（発表中止1題）の口頭発表と、73題のポスター発表がありました。そのうち、口頭発表が25題、ポスター発表27題が、大会発表賞の審査対象となりました。3月9日には、KKRホテル金沢にて懇親会を開催しましたが、参加者は、一般123名、学生61名でした。3月10日には、109名（うち非会員47名）の参加をいただき、金沢歌劇座で公開シンポジウム「郷土植物学が支える日本の科学」を行いました。ここでは、5名の演者に、日本各地で展開される郷土に根ざした植物研究をどのように盛り立てていくのかについて、それぞれのお立場からご講演をいただきました。今大会では、ここ金沢を中心に活動を続けてきた植物地理・分類学会の日本植物分類学会への合流が正式に決定しました。植物地理・分類学会の会員からは、合流後も郷土の植物に関する研究の支援を続けて欲しいという要望がありました。このシンポジウムにより、日本植物分類学会として、支援の方向性を示せたのは意味があったのではないかと思います。また、3月11日に開催した石川県立自然史資料館の標本庫見学会へは、13名の参加をいただきました。



盛況だった会場

2) 収支

第17回大会の収支は、以下の通りです。コンベンション補助金として、石川県から8万円、金沢市から4万円をいただきました。予想に反して多くの当日参加をいただいたため、約44万円の黒字となりました。おかげさまで、学会からいただいた大会補助金100,000円は使用せずに、大会を運営することができました。

第 17 回大会収支決算報告概要

収入		支出	
参加費	895,000	会場費	509,274
懇親会費	1,141,000	印刷費	177,650
弁当代	81,000	文具費	17,611
石川県補助金	80,000	懇親会費	1,026,424
金沢市補助金	40,000	弁当代	81,000
雑収入	1,000	茶菓費	18,007
		受賞者旅費・記念品	16,504
		アルバイト代	150,000
前大会からの繰越金	197,730	繰越金	439,260
総計	2,435,730		2,435,730

3) 大会組織と会場

第 17 回大会実行委員会は、金沢大学と石川県立自然史資料館のスタッフで組織しました。また、石川県生活環境部自然環境課の野上達也さんにも、会場設営のお手伝いをいただきました。

今大会では、金沢市が無償で提供する金沢大学サテライトプラザ会議室を各種委員会の会場として利用しました。口頭発表は金沢歌劇座の大集会室、ポスター発表は同 9, 10 会議室で行いました。当初、参加者を少なく見積もっていたため、会場費を抑える目的から、休憩室を設置せず、口頭発表会場の後部に喫茶スペースを設けました。しかし、いざ開催してみると参加者が想定よりも多く、口頭発表会場の座席が足りなくなりました。そのため、喫茶スペースに進出する形で、追加の椅子席を急遽配置しましたが、座席数をできるだけ多く確保する都合上、机までは配置できませんでした。また、3月9日からは、休憩室を第 5 会議室に開設しました。こちらの見積りの甘さから、皆様にはご不便をおかけすることとなりました。

会場設営において意外な落とし穴だったのが、物販です。今回は、実行委員会としては出店を把握しておらず、会場予約の段階で物販スペースを考慮していませんでした。直前にポスター会場の一角にスペースを捻出しましたが、やはり手狭だったため、結果として、廊下に出店していただくことになりました。

4) 研究発表と公開シンポジウム

発表賞の評価対象となる発表のプログラム編成においては、同じ研究グループによる発表が続かないように留意しました。研究グループ内での不当な競争を避ける目的ですが、似通った内容の研究が比べにくかったというご意見もあるかもしれません。一方、発表賞の評価対象外の発表順は、内容ごとにまとまるように編成しました。

こちらの編成ミス、急な発表順の変更、映写トラブルなどがあり、口頭発表の進行は常に遅れ気味でした。そのため、休憩時間が短くなるなどの問題も生じました。しかし、座長の皆様の機転により、大きな遅れは回避できました。今学会では、タイムキーパーをタブレット用アプリに任せました。このアプリは、演者が残り時間を正確に把握でき、タイムキーパーの人員を削減できる点で便利なものでした。しかし、カウントアップを開始し忘れるなど、人為的なミスは起こりました。複数人でカウントアップの開始を確認するなどの運用体制を、事前に検討すべきでした。



学会賞授与式

ポスター会場の設営にあたっては、なるべく通路幅を広く確保できるようにしました。しかし、通路を挟んでの発表番号の配置（偶数番号の向かいが奇数番号にするなど）までコントロールできず、発表場所によっては狭く感じられたところもあったかもしれません。

5) 懇親会

懇親会にも、想定外に多数のご参加をいただいたため、会場のスペースが十分ではありませんでした。また、限られた予算の中で郷土料理を提供していただくために、揚げ物と炭水化物が犠牲になりました。幸いなことに、多くの方からお酒の差し入れをいただきましたので、十分に飲めなかった方はいなかったと思いますが、食べ物も十分ではなかったかもしれません。ともあれ、石川だけでなく、各地のお酒が楽しめたのは、とてもうれしいことでした。差し入れをくださいました皆様に心から感謝いたします。

日本植物分類学会には、お酒を提供してくださる強力なサポーターがたくさんおられます。端から皆様のご好意をあてにするのもいかがかとは思いますが、飲み放題メニューはビールと非アルコール飲料だけに絞っても良かったかもしれないと反省しています。

6) おわりに

以上のように、見通しが不十分で、ご参加の皆様にはご不便をおかけしたことをお詫び申し上げます。それにもかかわらず、大会が盛会に終わりましたのは、ひとえに参加していただいた皆様のおかげです。末筆になりましたが、実行委員会一同、御礼を申し上げます。

2018 年度大会発表賞の報告

大会発表賞選考委員長 海老原 淳

2018 年度大会発表賞には、合計 52 題（口頭発表 25 題、ポスター発表 27 題）のエントリーがありました。16 名の選考委員は、各発表について「研究内容」と「プレゼンのうまさ」の 2 つの指標で採点を行い、集計結果を踏まえた合議から口頭・ポスター各 2 題が発表賞に選ばれました。プレゼンテーションのレベルは全体として年々高くなっており、特に口頭発表ではその傾向が顕著です。複数の審査員の心をとらえる要素（研究材料選びの優れたセンス、ユニークな仮説、長年の懸案の解消、等々）を含んだ発表が選ばれたといえるでしょう。4 名の受賞者のみなさま、おめでとうございます。

口頭発表部門（大会プログラム掲載順）

長澤耕樹（京都大・総人）「硫気孔原植物ヤマタヌキランの起源と遺伝的特性」

亀岡慎一郎（京都大・院・人環）

「ミスミソウの繁殖成功は集団内における 花色頻度の影響を受けるのか？」

ポスター発表部門（大会プログラム掲載順）

緑川昭太郎（新潟大・教育・理科）「水生植物トリゲモとオオトリゲモは

分類学的に識別可能か～形態・染色体・DNA 解析に基づく再検討」

根本秀一（福島大・院・理工）

「葉緑体 DNA の塩基配列に基づくキクバクワガタ種内分類群の遺伝的多様性」

2018 年度大会発表賞受賞者の喜びの声

ニューズレター幹事 堤 千絵

発表賞受賞者のみなさまの喜びの声をお伝えいたします。

長澤 耕樹さん

今回口頭発表賞をいただきました京都大学の長澤耕樹です。今回の受賞は思ってもいないことで、大変光栄に思っています。また、本研究では現地調査や実験などで多くの方々にご協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

私は東北地方の硫気孔原の最前線に生育するヤマタヌキランを対象として、植物の特殊環境への適応機構についての研究をすすめています。ヤマタヌキランは植物の生育にとって極めて過酷な硫気孔原の最前線に生育しており、植物の特殊環境への適応を考える上で非常に興味深い植物です。本発表では、ヤマタヌキランの姉妹群が亜高山帯の普通土壌に生育するコタヌキランであること、ヤマタヌキランが時系列に沿った3つの要因で現在の著しく低い遺伝的多様性に至った可能性があることを報告致しました。今後は今回の受賞を励みに、ヤマタヌキランの硫気孔原への適応機構の解明を進めていきたいと思っております。



亀岡慎一郎さん

口頭発表賞をいただきました、京都大学の亀岡慎一郎です。このような賞をいただき、大変光栄に思います。私は、多様な花色が集団内で隣接して生育しているミスミソウの、花色多型維持機構の解明を目指し、研究を進めております。これまで、集団内に二色の花色多型を有する植物では、「負の頻度依存選択」によって多型が維持されると考えられてきましたが、今回の研究結果は、より複雑な花色多型を有するミスミソウでは、単純な頻度依存の関係性がないことを示しました。多型維持のメカニズムの解明には長期的な調査が必要で、未だ分からない事ばかりですが、今回、臆げに維持機構の入り口が見えた研究で賞を頂けたことは大変嬉しく、また今後の励みになりました。本研究を進めるにあたり、ご指導いただいた先生方、並びに助言をして下さった皆様に、深く御礼申し上げます。

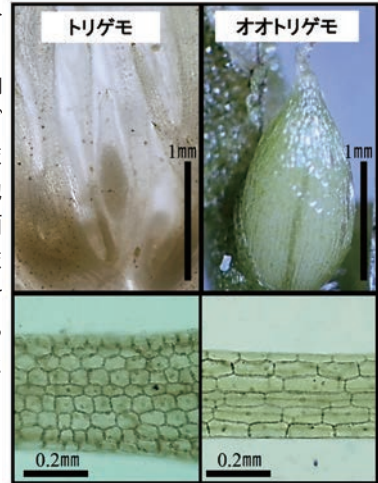


同一集団内に生育する花色の一例

緑川 昭太郎さん

ポスター賞をいただきました、新潟大学の緑川昭太郎です。今春より新潟大学大学院自然科学研究科に入学いたしました。まず、本研究では多くの方々からご支援・ご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。私は水生植物のトリゲモとオオトリゲモ（トチカガミ科）を研究対象とし、形態や DNA から両種のカ分カを再検討しました。両種のカ最も有効な識別点カは葯室のカ数とされていますが、他の形態形質における差カは文献によって様々であり、また海外では両種を同一分類群とする報告もあるため、識別カが曖昧であるといえます。しかし、日本では葯室のカ長さ及び葉のカ細胞のカ長さで両種を分けられることが、本研究で明らかとなりました。両種については明らかにすべき課題カが未だ山積してありますが、今回の受賞に驕ることなくさらに精進して参りますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

図：トリゲモとオオトリゲモのカ葯室及び葉のカ細胞



根本 秀一さん

ポスター賞をいただきました福島大学の根本秀一です。この度は過分なる評価を賜りありがとうございました。私はオオバコ科クワガタソウ属のカ分類学的研究に取り組んでいます。今回の発表では、本州からサハリン、千島にかけて分布し、11の種内分類群からなるキクバクワガタを取り上げました。種内分類群（+シノニムと未記載品種）を網羅的に収集し、葉緑体 DNA の塩基配列に基づいたハプロタイプネットワークを作成したところ、地理的隔離を反映した多様な遺伝的背景を持った種であることがわかりました。今後は分類学的な見直しを行うとともに、多様化プロセスの解明などにも取り組んでいきたいと思ひます。本研究を進めるにあたり、全国のカ数多くの方々にご協力頂きました。御礼申し上げます。

図：キクバクワガタの種内分類群、シラガミクワガタ（上）とホソバノキクバクワガタ（下）



2018 年度第 1 回評議員会議事抄録

庶務幹事 田中 伸幸

会場：金沢大学サテライト・プラザ1階会議室（金沢市西町三番丁 16 番地 金沢市西町教育研修館内）

日時：2018 年 3 月 7 日（水）16 時～ 19 時

参加者

評議員：総数 12 名、（ ）内は被委任者

出席 [11 名]:海老原 淳, 岡崎 純子, 黒沢 高秀, 志賀 隆, 副島 顕子, 土金 勇樹, 坪田 博美, 藤井 伸二, 布施 静香, 村上 哲明, 米倉 浩司

委任状出席 [1 名]: 西田 佐知子（黒沢 高秀）

幹事会・委員会委員長：()内は役職

出席 [16名]:伊藤元己(会長), 田中伸幸(庶務), 池田啓(会計), 高野温子(図書), 堤千絵(ニュースレター), 矢野興一(ホームページ), 田村実(編集委員長・英文誌編集), 鈴木浩司(和文誌編集), 黒沢高秀(植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合), 朝川毅守(自然史学会連合), 布施静香(講演会), 藤井伸二(絶滅危惧植物専門第一委員会委員長), 伊藤元己(植物データベース専門委員会委員長), 池田博(国際シンポジウム準備委員会委員長), 永益英敏(学会賞選考委員長, 命名規約邦訳委員会委員長), 村上哲明(ABS問題対応委員会委員長), 西野貴子(野外研修会)

欠席 [3名]:樋口正信(絶滅危惧植物専門第二委員会委員長), 角野康郎(植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会委員長), 奥山雄大(学術会議若手アカデミー担当委員)

1. 評議員会開催にあたり, 伊藤元己会長から挨拶があった。
2. 庶務幹事により定足数が確認された。会長, 評議員 11 名出席, 委任状出席 1 名により評議員会は成立した。
3. 評議員会議長として海老原淳氏が, 議事録署名人として藤井伸二氏, 志賀隆氏の 2 名が選出された。
4. 報告事項
 - 4.1. 自然史学会連合関連報告 2017 年度活動報告および 2018 年度活動計画の説明がなされた。
 - 4.2. 日本分類学会連合報告 2017 年度活動報告および 2018 年度活動計画の説明がなされた。
 - 4.3. 植物分類学関連学会連絡会報告 特に活動報告はなかった。
 - 4.4. 学術会議若手アカデミー報告 特に活動報告はなかった。
 - 4.5. 各種委員会に関する報告
 - (1) 編集委員会 英文誌『APG』および和文誌『分類』の昨年度編集状況および 2018 年度出版計画について説明がなされた。
 - (2) 学会賞選考委員会 日本植物分類学会賞の選考経過の説明がなされた。
 - (3) 論文賞選考委員会 日本植物分類学会論文賞の選考経過の説明がなされた。
 - (4) 植物データベース専門委員会 日本産維管束植物のリスト(グリーンリスト)の改訂を 1 度行った。この先, 種情報を充実させるため, 大西亘氏(神奈川県立生命の星・地球博物館)を委員長として専門委員会の委員を一新することの報告がなされた。
 - (5) 絶滅危惧植物専門第一委員会 現状説明と活動報告。環境省第 5 次レッドリスト改定のための現地調査の報告がなされた。
 - (6) 絶滅危惧植物専門第二委員会 現状説明と活動報告。(委員長欠席のため庶務幹事が代理説明)
 - (7) ABS 問題対応委員会 日本政府は当面, 日本国内の野生生物(遺伝資源)に対して主権を主張しないことになったので, 従来通り, 国内の生物標本・試料を日本政府(環境省)からの許可(PIC)なしで外国人研究者に提供できることが説明された。また, 2017 年 4 月から首都大学東京・牧野標本館は, 国立遺伝学研究所の ABS 学術支援チームの活動の分担者として, 日本における多様性生物学分野の学術研究に対する ABS への対応支援を開始していることの報告があった。
 - (8) 国際シンポジウム準備委員会 2017 年度はシンポジウムの開催がなかったため特に活動なし。
 - (9) 植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会 「地域植物研究会等の現状に関するアンケート」を全国の地域植物研究団体に送り, 56 団体から回答を得たことを報告。(委員長欠席のため庶務幹事が代理説明)
 - (10) 国際命名規約邦訳委員会 邦訳委員会の『深圳規約(日本語版)』の出版は 2019 年春を目指すという活動計画の報告がなされた。
 - 4.6. 図書関連報告 寄贈雑誌・交換状況, バックナンバーの販売状況の説明がなされた。CiNii から J-STAGE に移行された『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』, 『分類』, 『植物分類, 地理』全巻号の論文 PDF のチェックと公開作業を行ったことが報告された。
 - 4.7. 日本植物分類学会講演会報告 2017 年度の講演会の実施について報告。
 - 4.8. ニュースレターに関する報告 2017 年度実施報告および, 2018 年度準備状況の説明。

- 4.9. ホームページ・メーリングリスト関連報告 学会公式 HP および ML の運用状況の説明。
- 4.10. 会務報告 2017 年度の事業報告。
- 4.11. 会計報告 2017 年度の会員状況、会費滞納者の状況の説明。
- 4.12. その他
- (1) 野外研修会について 2017 年実施報告および、2018 年度準備状況について説明。
 - (2) 次期会長・評議員の選出について
選挙管理委員会委員長に岡崎純子氏（大阪教育大学）を指名し、了承された。
選挙については、5～6月に行うこととすると報告された。
5. 審議事項
- 5.1. 2017 年度事業報告（案）について
田中庶務幹事より 2017 年度事業報告（案）が提案され、質疑の後、一部修正の後、承認された。
- 5.2. 2017 年度決算報告（案）について
池田会計幹事より 2017 年度決算報告（案）が提案され、質疑の後、一部修正の後、承認された。
- 5.3. 2018 年度事業計画（案）について
田中庶務幹事より 2018 年度事業計画（案）が提案され、質疑の後、一部修正の後、承認された。
- 5.4. 2018 年度予算（案）について
池田会計幹事から 2018 年度予算（案）が提案され、質疑後、一部修正の後、承認された。
- 5.5. 日本植物分類学会論文賞選考規定第 2 条の変更
和文誌の名称変更に伴い、日本植物分類学会論文賞選考規定第 2 条を改定する提案がなされ、審議結果、承認された。
- 5.6. 次期会長、評議員の選挙について
『役員等の選出についての細則』第 2 条、「評議員会は若干名の会長候補を推薦することができる。」ことに則り、会長候補の評議員会推薦を行った。
- 5.7. 名誉会員の推薦について
伊藤会長より名誉会員の条件を満たす 2 名の候補があり、審議の結果、今回の総会での推薦を決定した。
- 5.8. 除名について
伊藤会長より 4 年以上の会費未納の 6 名の除名候補の提案がなされた。審議の結果、提案通り 6 名の除名が承認された。
6. その他
- 6.1. 第 18 回大会開催地について
伊藤会長より説明があり、第 18 回大会は、2019 年 3 月 7 日（木）～3 月 9 日（土）に東京都八王子市にある首都大学東京の南大沢キャンパスで開催することが承認された。
- 6.2. 総会議事について
田中庶務幹事より説明があり、質疑の後、承認された。

2018 年度総会議事抄録

庶務幹事 田中 伸幸

会場：金沢歌劇座（金沢市下本多町 6 番丁 27 番地）

日時：2018 年 3 月 9 日（金）14:25～16:00

1. 総会に先立ち伊藤元己会長から挨拶があった。
2. 植田邦彦大会会長（金沢大学）より挨拶があった。
3. 逝去された学会員への黙祷が捧げられた。

4. 綿野泰行氏（千葉大学）が総会議長に選出された。
5. 報告事項
 - 5.1. 会務報告
庶務幹事より、報告内容は第一号議案と同じであるので議案審議の際に報告するとの説明があった。
 - 5.2. 会員数について
池田会計幹事より、会員数の説明がなされた。
 - 5.3. 各委員会からの報告
各委員会のうち、編集委員会、絶滅危惧植物専門第一委員会、植物データベース専門委員会、ABS 対応委員会、植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会、国際命名規約邦訳委員会の各委員長から活動報告がなされた。
 - 5.4. 除名について
伊藤会長より 4 年以上の会費未納の 6 名の除名を行ったことが報告された。
6. 審議事項
審議に先立って、出席者数の確認を行い、庶務幹事より総会出席者が 105 名（後 107 名）であることを報告した。
 - 6.1. 【第一号議案】 2017 年度事業報告、ならびに 2017 年度決算報告
前年度の事業報告と決算報告が田中庶務幹事と池田会計幹事よりそれぞれ行われた。瀬戸口浩彰監事、渡邊幹男幹事より、会務および会計が適切に行われているとの監査報告を受けた。審議の結果、賛成 105 票、反対 0 票で出席者（105 人）の 3 分の 2 以上をもって承認された。
 - 6.2. 【第二号議案】 2018 年度事業計画、ならびに 2018 年予算案
田中庶務幹事と池田会計幹事より上記の件について説明があった。審議の結果、事業計画に、名称変更後の和文誌の発行等が含まれるため、第二号議案の採決は、第三号議案、第四号議案の後に行うべきとの意見があり、第三号議案、第四号議案承認の後、採決を採った。その結果、賛成 107 票、反対 0 票で出席者（107 人）の 3 分の 2 以上をもって承認された。
 - 6.3. 【第三号議案】 植物地理・分類学会移行会員の初年度会費の減免について
「平成 29 年度に日本植物分類学会の会員でない植物地理・分類学会の会員について、平成 30 年 4 月から日本植物分類学会に入会する場合、初年度会費は 5,000 円とする。ただし、1 月～3 月までに日本植物分類学会で発行する雑誌等出版物は遡っては提供しない。」
上記の通り、伊藤会長より平成 29 年度に日本植物分類学会の会員でない植物地理・分類学会の会員について、平成 30 年 4 月から日本植物分類学会に入会する場合、両学会の会計年度の違い等を配慮して、初年度会費のみ 5,000 円とするという植物地理・分類学会移行会員の初年度会費の減免が提案された。審議の結果、賛成 105 票、反対 0 票で出席者（105 人）の 3 分の 2 以上をもって承認された。
 - 6.4. 【第四号議案】 和文誌『分類』と植物地理・分類学会誌『植物地理・分類研究』の統合および『植物地理・分類研究』の誌名・巻号引継ぎについて
「日本植物分類学会の和文誌『分類』と植物地理・分類学会誌『植物地理・分類研究』を統合する。2018 年 4 月からの和文誌の誌名は『植物地理・分類研究』とし、巻号は第 66 巻 1 号から始める。」
植物地理分類学会が日本植物分類学会へ合流するにあたり、日本植物分類学会の和文誌『分類』と植物地理・分類学会誌『植物地理・分類研究』を統合し、和文誌の誌名は『植物地理・分類研究』として、巻号も引き継いで第 66 巻 1 号から始める提案がされた。審議の結果、賛成 106 票、反対 0 票で出席者（106 人）の 3 分の 2 以上をもって承認された。
 - 6.5. 第五号議案 日本植物分類学会論文賞選考規定第 2 条の変更
和文誌の名称変更に伴い、日本植物分類学会論文賞選考規定第 2 条を以下の通り改定する提案がされ、審議の結果、賛成 107 票、反対 0 票で出席者（107 人）の 3 分の 2 以上をもって承認された。

(旧)

第2条 「日本植物分類学会論文賞」は『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』または『分類』に優れた研究成果を発表した者に授与する。

(新)

第2条 「日本植物分類学会論文賞」は『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』または『植物地理・分類研究』に優れた研究成果を発表した者に授与する。

6.6. 第六号議案 名誉会員の推薦について

会則第5条に基づき、条件を満たす以下の2名の会員を名誉会員に推薦した。審議の結果、賛成多数で承認された。

高橋 新氏, 加藤 信重氏

7. その他

7.1. 第18回大会開催地について

伊藤会長より次回第18回大会について首都大学東京の南大沢キャンパスで開催することが告知され、村上哲明大会準備委員長（首都大学東京・牧野標本館）より挨拶があった。

7.2. 次期会長・評議員の選出について

岡崎純子氏を選挙管理委員長として、5～6月に選挙を行う。

以上

2018年度事業計画および予算

庶務幹事 田中 伸幸

(1) 集会等の開催

- ・学術集会, 講演会, 研修会
年次学術集会（日本植物分類学会第17回大会：3月8～11日金沢市）を開催する。
2018年度講演会を開催する（2018年12月15日：大阪学院大学）。
2018年度野外研修会を開催する（日時, 場所共に未定）。
- ・総会, 評議員会
評議員会を開催する（3月7日）。
年次総会を年次学術集会に合わせて開催する（3月9日）。

(2) 出版物の刊行

- ・学会誌の発行
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第69巻1～3号（計3冊）を発行する。
和文誌『植物地理・分類研究(The Journal of Phytogeography and Taxonomy)』第66巻1～2号（計2冊）を発行する。
- ・ニュースレター『日本植物分類学会ニュースレター』68～71号（計4冊）を発行する。

(3) 委員会活動

- 以下の委員会を組織し、目的に沿って活動する。
- ・絶滅危惧植物専門第一委員会
各都道府県の主任調査員・調査員の協力の下に、環境省の第5次絶滅危惧植物の全国調査を実施する（前年度から継続）。

以下, 14ページにつづく

2018 年度予算（一般会計）

収入の部	単価	数	予算	前年度予算との差異	
会費					
通常（一般）	7,000	704	4,928,000	1,303,000	注1
通常（学生/海外）	3,000	105	315,000	△ 57,000	注2
団体会員	8,000	19	152,000	0	
移行会員（一般）	5,000	50	250,000	△ 250,000	注3
特別会計から移管（会費値上げまでの補正）			0	△ 1,250,000	注4
特別会計から移管（APG出版補助）			310,000	△ 230,000	注5
合計			5,955,000	△ 484,000	

支出の部

大会補助費			100,000	0	
講演会補助費			70,000	0	
出版物印刷費				0	
APG vol.69(1,2,3)	930,000	3	2,790,000	150,000	注6
植物地理・分類研究 vol.66(1, 2)	700,000	2	1,400,000	100,000	注6
ニュースレターNo.68-71	55,000	4	220,000	20,000	注6
英文校閲費			50,000	0	
出版物送料				0	
APG送料	100	3,100	310,000	10,000	注6
和文誌送料	100	2,100	210,000	10,000	注6
NL送料	80	4,100	328,000	8,000	注6
会議費			50,000	0	
学会賞表彰経費			50,000	0	
自然史学会連合負担金			20,000	0	
分類学会連合負担金			10,000	0	
事務局管理費				0	
消耗品費			50,000	0	
交通費			100,000	75,000	注7
アルバイト賃金			0	0	
封筒等印刷費			50,000	△ 150,000	注8
通信費（小包手数料を含む）			50,000	0	
手数料・その他			20,000	0	
自動振替集金代行基本料			3,240	0	
自動振替口座確認手数料	130	160	20,800	0	
レンタルサーバー使用料			26,244	244	注9
国際シンポジウム積立金			200,000	200,000	注10
予備費			100,000	0	
合計			6,228,284	423,244	

単年度収支	△ 273,284	
前年度からの繰越金	5,151,683	
次年度への繰越金	4,878,399	

注1:会員数・会費の見直しにより更新

注2:会員数の見直しにより更新。

注3:地理・分類学会の会員のうち、2018年4月より分類学会に新たに入会する会員から見込まれる収入。

注4:会費値上げまでの措置のため、2017年度のみ設けた補正のため。

注5:雑誌出版から見込まれる特別収入（バックナンバー販売、カラーチャージ、著作権使用料）のうち、APGの編集費用を除いたもの。

注6:移行会員の増加を見越して増額。

注7:幹事会の引継ぎ会議を行う必要があるため。

注8:新規に封筒を印刷する必要が無いため。

注9:実態に合わせて更新。

注10:2022年の開催及び若手派遣に備えての積立金。

2018 年度予算（特別会計）

収入	予算	前年度予算との差異	
前年度繰越金	4,185,826	2,048,949	
国際シンポジウム積立金	200,000	200,000	注1
命名規約和訳販売	0	△ 140,000	注2
バックナンバー販売	20,000	△ 40,000	注2
利息	100	△ 650	注3
雑収入	50,000	0	
APGカラーチャージ	486,000	0	注4
絶滅危惧維管束植物の調査委託費	10,000,000	0	注5
寄付	0	0	
合計	14,941,926	2,068,299	

支出

命名規約和訳出版	0	△ 500,000	注6
国際シンポジウム準備金	0	0	注7
国際シンポジウム若手派遣	0	0	注8
APG編集作業への謝金	240,000	189,000	注9
一般会計へ移管（会費値上げまでの補正）	0	△ 1,250,000	注10
一般会計へ移管（APG出版補助）	310,000	△ 230,000	注11
絶滅危惧維管束植物の調査費（2017年分）	2,850,000	△ 6,650,000	注12
絶滅危惧維管束植物の調査費（2018年分）	6,650,000		注12
絶滅危惧植物の調査に関連する雑費（2017年分）	487,040	△ 12,960	注13
絶滅危惧植物の調査に関連する雑費（2018年分）	12,960		注13
次年度への繰越金	4,391,926	3,859,299	注14
合計	14,941,926	2,068,299	

注1:2022年の開催に備えての積立金。

注2:2017年の実績に基づき更新。

注3:2017年の水準に基づき更新。

注4:APGのカラー図表に対する課金（18,000円×27個として計算）。

注5:絶滅危惧維管束植物の調査のため、自然環境研究センターから委託される予算。

注6:次回の出版に備えた積立金として2017年より、特別会計の中で500,000円/年を繰り越す。ただし2018年は繰越せる予算がないため300,000円とする。

注7:日本でのシンポジウムの開催がないため。

注8:国際シンポジウムに関する積立金が十分でないため。

注9:前年の状況に基づき増額（80,000円/号）。

注10:会費値上げまでの措置のため、2017年度のみ設けた補正。

注11:雑誌出版から見込まれる特別収入（バックナンバー販売、カラーチャージ、著作権使用料）のうち、APGの編集費用を除いたもの。

注12:絶滅危惧維管束植物の調査費。

注13:絶滅危惧植物の調査に関連する振り込み手数料などの事務経費。

注14:絶滅危惧種調査費として3,337,040円、命名規約和訳出版として800,000円、国際シンポジウム積立金として200,000円を含む（実質54,886円）。

- ・絶滅危惧植物専門第二委員会
コケ類、藻類、菌類、地衣類の各グループの委員及び調査協力者により、環境省の第5次絶滅危惧植物の全国調査を実施する。
- ・植物データベース専門委員会
- ・学会賞選考委員会
- ・論文賞選考委員会
- ・大会発表賞選考委員会
- ・ABS 問題対応委員会
- ・国際シンポジウム準備委員会
国際植物分類学シンポジウムを2018年11月に中国・杭州で開催する。
- ・植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会
- ・国際命名規約邦訳委員会
- (4) 表彰
 - ・日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行う。
 - ・日本植物分類学会論文賞の授与を行う。
 - ・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行う。
- (5) 次期会長、次期評議員の選出
5-6月に会長・評議員の選挙を行う。
- (6) 国内外の関係学術団体との連携・協力
 - ・国内学会連合等への参加・連携を行う：日本学術会議、自然史学会連合、日本分類学会連合など。
 - ・The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT)、および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) 等と連携する。
- (7) その他
 - ・学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行う。
 - ・当年度発行の『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』と『植物地理・分類研究』の論文PDFをJ-STAGEで公開する。
 - ・植物分類学関連情報（学術集会、研究動向、出版物、公募）を収集し、ニュースレター、ホームページ等で提供する。
 - ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行う。
 - ・『植物分類学研究マニュアル』（仮題）の出版計画を進める。

2018年度予算→12～13ページ

IUCN レッドリスト評価者トレーニングワークショップに参加して

海老原 淳（国立科学博物館）・前田 綾子（高知県立牧野植物園）

2017年12月4日～6日の3日間、IUCN レッドリストプログラム事務所（イギリス、ケンブリッジ）のスタッフによる日本で初めてのトレーニングワークショップが東京で開催された。植物分野からは海老原と前田の2名が参加し、他約10名は魚類と昆虫分野の研究者が中心であった。

トレーニングワークショップでは、まずIUCNの活動紹介、レッドリストの用語の定義の解説、各基準の詳細な説明から始まり、仮定の種を用いた模擬評価、参加者が実際に持参した日本産種のデータを題材とした評価、公開データの解説や提供されているツール類の紹介、等々が行われた。合間にはグループディスカッション・発表に加えて、レクチャーから得られた知識を総動員しないと正解に辿り着けないテスト(!?)も実施されたが、なかなかの難問で、全員不正解という問題すらあった。海老原はアセスメントのマニュアルを一読したことはあったものの、実際の評価に挑んだのはこれが初めてであり、日本産種

について実際にこのような手順を踏んで1種ずつ評価することになれば、かなりの労力を要するであろうことを実感した。

環境省の最新のレッドデータブックでは、各カテゴリーは定性的要因と定量的要因の評価基準の併用によって定義されている。このうち定量的要因の部分はIUCN基準に準拠しているが、定性的要因の部分は日本独自のものであり、総体としても「日本の独自基準で評価されたレッドリスト」であるのが現状である。定性的要因と定量的要因の使い分けは大分類群ごとに様々であり、定量的評価に用いることのできる情報が乏しいためにほぼ定性的要因のみを用いている分類群から、魚類のように定量的要因のみを用いている分類群まである（維管束植物は全て定量的評価をしているとの誤解が一部にあるようだが、相当数の種については定量データが得られずに定性的評価を行っている）。環境省のレッドリスト・データブックが完全にIUCN基準に準拠しているならば、日本固有種についてはそのままIUCNの地球規模レッドリストに移行することが可能なはずである（本ワークショップ終了後、魚類では実際にそのような作業が進められるとのことであった）。植物についても、全面的な定量的評価に移行する時期に来ていると思われる。近年のさく葉標本はGPSの情報も付随しているものが多いことから、（同定が正しいと仮定すれば）少なくともB基準（出現・占有面積）の評価のたたき台は作ることが出来る。標本データを全国的に統合、情報を整理できれば、評価に必要な箇所を推定・抽出して、各地域での調査そのものをより効率的におこなえるのではないだろうか。

IUCNは地球規模のレッドリスト編纂のための組織であるという思い込みがあった。しかし、近年では地域レッドリスト作成のサポートにも力を入れており、日本語版マニュアルも作製されている（webサイトからダウンロード可能）。その詳細な指針を今回初めて目にしたのだが、目から鱗の内容であった。例えば、評価対象地域内で生活環が回っていない種は評価前に「適用外NA」にカテゴライズして評価対象から外さなくてはならないという。この基準に従えば、現在環境省レッドリストに掲載されている種の中には、NAに該当してレッドリストから外れるものが出てくるのではないだろうか。例えば、ニッパヤシは全28個体のうちの27個体が同一クローンであることが示唆されており、生活環が日本国内で回っているとは言いがたいだろう。環境省レッドデータブックにおいて「絶滅EX」にカテゴライズされている種の中で、日本固有でないものは「地域絶滅RE (Regionally Extinct)」のカテゴリーを与えるのが正しい。さらに、再導入された地域絶滅種が、自然に繁殖に成功して子孫が持続可能な場合には評価をする必要がある。また、地域（国）外で普通だったり保護されていたりする種が継続的に地域（国）内に移入してくる場合、ランクを適切なレベルに下げるというルールがある。海流や水鳥による長距離散布を行う植物などの中には、このルールに該当するものがあるのではなかろうか。また、都道府県版のレッドリストにIUCN基準を適用する場合、このルールが相当数の種のカテゴリーに影響を与えることが予想される。

日本の環境省は、定量的評価を推奨しながらも、定性的評価を完全に排することはできないでいる。しかし今回日本でこのようなワークショップが開催されたことから、比較的情報の豊富な生物群における定量的評価への完全移行が今後一層進むものと予想される。物的証拠の残しやすい植物においても、その流れに乗り遅れないような努力が求められるであろう。さらには、評価の基となる情報を集める方法について、属人的でなく持続的に行うためにはどうしたらいいかを併せて考えていく必要がある。

2017年に到着した交換図書一覧

図書幹事 高野 温子

Aliso 35(1)

Allertonia 15

Annals of the Missouri Botanical Garden 101(4), 102(2) * 101(1) は送付依頼中

Blumea 61(3) * 冊子体配布は終了

Blyttia 74(4), 75(1), 75(3) * 75(2) は送付依頼中

Bocconeia 27
Bulletin Mensuel de la Société Linnéenne de Lyon 86(1-2), 86(5-6), 86(7-8), 86(9-10) * 86(3-4) は
送付依頼中
Bulletin Mensuel de la Société d'Histoire Naturelle de Toulouse 152
Bulletin of the National Museum of Nature and Science 42(4), 43(1), 43(2), 43(3)
The Bulletin of the National Tropical Botanical Garden 33(1), 33(2)
Bulletin of the Osaka Museum of Natural History 70
Candollea 71(2), 72(1), 72(2)
Cryptogamie 38(1), 38(2), 38(3)
Diatom 32
Englera 34
Fieldiana 10, 11
Flora Kanagawa 83, 84
Flora Mediterranea 26
Folia Biologica et Geologica 57(1), 57(2), 57(3)
Fritschiana 83, 84, 85
The Gardens' Bulletin Singapore 68(2), 69(1)
Gardenwise 48, 49
岐阜県植物研究会誌 31
Hoppea 77
Huntia 16(1)
Journal of Plant Biology 59(6), 60(1), 60(2), 60(3), 60(4), 60(5)
Journal of Plant Research 130(1), 130(2), 130(3), 130(4), 130(5), 130(6)
Journal of Tropical and Subtropical Botany 25(1), 25(2), 25(3), 25(4), 25(5)
神奈川県立博物館研究報告 自然科学
神奈川県自然誌資料
Kew Bulletin 71(4), 72(2), 72(3) * 72(1) は送付依頼中
Korean Journal of Plant Taxonomy 46(4), 47(1), 47(2), 47(3)
Memoirs of the National Museum of Nature and Science
長岡市科学博物館研究報告 52
Novon 25(1), 25(2), 25(3)
大阪市立自然史博物館所蔵目録 48
Plant Diversity (=Plant Diversity and Resources 38(5), 38(6), 39(1), 39(2), 39(3), 39(4)
Plant Ecology & Diversity 9(4), 9(5-6), 10(1), 10(2-3)
蘚苔類研究 11(8), 11(9), 11(10)
滋賀の植物 41
自然史研究 17
Smithonian Contributions to Botany 105
種生物学会和文誌 エピジェネティクスの生態学
植物地理分類研究 64(1)
植物研究雑誌 92(1), 92(2), 92(3), 92(4), 92(5), 92(6)
Systematics and Biodiversity 14(4-6), 15(1-3)
Thai Forest Bulletin (Botany) 44(1-2)
Thaiszia 26(1), 26(2)
The Bulletin of the National Tropical Botanical Garden 32(4)
徳島県立博物館研究報告 27
Webbia 72(1)

Willdenowia 46(3), 47(1), 47(2)
東アジア国際シンポジウム要旨集 2016

学会員の方は、兵庫県立人と自然の博物館（兵庫県三田市弥生が丘6丁目 アクセス方法は <http://www.hitohaku.jp> をご覧ください）にて閲覧可能です。閲覧希望の方は、図書幹事にお問い合わせください。文献複写依頼はお受けできませんので、予めご了承ください。

お知らせ

2018年度日本植物分類学会野外研修会のお知らせ

沢 和浩（東北植物研究会）・原 慶明（西川町立大井沢自然博物館）

月山は標高 1,984 m で山形県のほぼ中心に位置し、周辺地域は日本でも有数の豪雪地帯です。大量の雪は植物にも影響を与え、遺存固有植物や多雪地特有の植物を生育させることとなります。このことにより月山は国の天然記念物に指定され、国立公園の特別保護地区や特別地域に指定されております。この月山地域において、ガッサントリカプトをはじめキヌガサソウ、オオレイジンソウ、ウゴアザミ、オニシオガマ、オタカラコウなどの多雪地の植物を観察します。また湿地においては、タマミクリ、イトモ、ヒメカイウ、ミチノクホタルイなどの植物を観察します。ブナ林内では、ユキツバキ、コシノカンアオイ、ヤシヤビシヤク、河川敷内ではオオバヤナギ、ドロノキなどが見られる場所もあります。

【日程】2018年9月8日（土）～10日（月）

第1日目（8日）12時30分 JR 左沢線 寒河江駅に集合。送迎車にて西川町大井沢に移動し大井沢湯殿山神社～合戦場湿原周辺の植物を2時間程度観察し、夕方、大井沢自然博物館で研修会を行う。その後徒歩で宿泊地の橋本荘に移動し懇談会を行う。

第2日目（9日）8時に送迎車で旅館を出発し、月山姥沢に向かう。月山リフトに乗り姥ヶ岳に登り、金姥から装束場に向かう。昼食の後、石跳川沿いを山形県立自然博物館に向けて下山する。再び送迎車により大井沢の旅館に戻り研修成果の交換会を行う。

第3日目（10日）8時30分に送迎車で旅館を出発し、弓張平に向かう。そこから旧六十里越街道を椿沢まで散策し、再び送迎車により JR 寒河江駅に向かう。13時30分頃解散予定。

【募集定員】20名程度（締切前であっても定員に達し次第、受付を終了しますことをご了承ください）

【申込締切】7月末日

【宿泊先】橋本荘（予定）西川町大井沢

【協力】西川町、東北植物研究会

西川町立大井沢自然博物館の館内研修施設でセミナー予定、同定、標本作成可

【参加費】2万円

宿泊費2泊（夕食・朝食付）、2日目・3日目昼食代、リフト代、月山入山協力金、傷害保険料、送迎代など含む（集合・解散場所までの往復交通費等は自己負担）。

【その他】

・1日目と3日目は採集可能です。

- ・2日目は国立公園特別保護地区, 第2種・第3種特別地域になりますので採集は原則禁止とします。
- ・2日目雨天時は, 月山姥沢～県立自然博物館のコースとします。

【申込先】

西野貴子 (野外研修会担当委員)

電子メール: nishino@b.s.osakafu-u.ac.jp

ファックス: 072-254-9932 (西野宛てをご明記ください)

郵便: 〒599-8531 堺市学園町 1-1 大阪府立大学大学院理学系研究科 C10 棟

申込には, お名前, ご住所, ご所属 (あれば), 急ぎの場合の連絡先 (電子メールや電話番号) をご明記ください。

ご連絡いただいてから4日以内に受付の返信をいたします (郵便の場合には, お電話を差し上げます)。もし返信等がない場合には, 恐れ入りますが再度ご連絡いただきますようお願い申し上げます。

野外研修会担当委員よりご案内

今年度の野外研修会は, 久しぶりの東北, そして初めての山形での開催です。東北植物研究会でご活躍されている沢和浩さんに世話役をお引き受けいただき, 出羽三山のひとつ, 月山周辺で, 美しいブナ林や高層湿原などの別天地をじっくり巡ります。また, 植物だけでなく, 湯の湧き出る巨石を御神体とする湯殿山神社や, 松尾芭蕉の足跡など, 文化的にも彩り豊かな出羽地方にどうぞ足をお運びください。
(西野 貴子)

東アジア国際植物分類学シンポジウム 2018 のご案内

国際シンポジウム準備委員長 池田 博

植物分類学に関する国際シンポジウム (日中韓3国シンポジウム) を, 今年の秋に中国・浙江大学で開催いたします。

【会場】 浙江大学 (Zhejiang University: 中国浙江省杭州市西湖区)

【日程】 2018年10月31日 (水) ~ 11月4日 (日)

10月31日 (水)・11月1日 (木) シンポジウム (口頭発表・ポスター発表)

11月2日 (金) ~ 11月4日 (日) エクスカーション

今回のシンポジウムは, 浙江大学の傅承新 (Fu, Cheng-Xin) 教授と杭州師範大学の金孝鋒 (Jin, Xiao-Feng) 教授にお世話いただき, 2日間を浙江大学でシンポジウム, その後2泊3日のエクスカーションを予定しています。エクスカーションは, 浙江省内の適当な場所を考えています。

詳しい日程, 参加申込, 発表の要領・用紙の体裁等につきましては, 固まり次第, ご連絡いたします。会員の皆様におかれましては, 10月最終週から11月第一週の予定を空けていただき, ふるってご参加いただきますようお願いいたします。特に若手の研究者の皆様には, このシンポジウムでの発表は国際学会での発表と位置づけられますので, 積極的に参加・発表していただきますよう, お願いいたします。

【問い合わせ先】

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学総合研究博物館 池田 博

Tel/Fax: 03-5841-2839

E-mail: h_ikeda@um.u-tokyo.ac.jp

日本植物分類学会第 18 回大会（八王子）のお知らせ

第 18 回大会会長 菅原 敬（首都大学東京 牧野標本館）

日本植物分類学会第 18 回大会を、下記の通り開催いたします。大会および参加申し込みの詳細は、大会ホームページおよび 2018 年 8 月号・11 月号のニュースレターでお知らせいたします。本大会は、新築された牧野標本館・別館、ならびに一部改修された牧野標本館・本館のお披露目会も兼ねております。多数のご参加をお待ちいたします。

【会場】 首都大学東京 南大沢キャンパス

（東京都八王子市南大沢 1-1, https://www.tmu.ac.jp/university/campus_guide/access.html）

【日程】 2019 年 3 月 6 日（水）：各種委員会、評議員会

3 月 7 日（木）：研究発表

3 月 8 日（金）：研究発表、総会、受賞講演、懇親会など

3 月 9 日（土）：研究発表、公開講演会（午後）

【ホームページ】 現在作成中、アクセス可能になり次第、日本植物分類学会ホームページ等にて連絡いたします。

【問い合わせ先】 日本植物分類学会第 18 回大会（八王子大会）実行委員会

大会実行委員長 村上 哲明

〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 首都大学東京 牧野標本館内

TEL: 042-677-1222; E-mail: nmurak@tmu.ac.jp

庶務からのお願い

住所・所属変更時におけるメーリングリストのメールアドレス変更のお願い

当学会では、会員のうち入会時に加入を希望した方に、メーリングリストにて新刊案内やシンポジウムの案内、公募情報など会員向けの情報をお送りしております。

ご住所、ご所属が変更になった場合、そのご連絡は速やかに会計幹事宛に届け出ていただくことになっておりますが、メーリングリストへのメールアドレスも変更になる場合は、住所・所属の変更届けとは別に、ホームページ担当幹事宛に変更を希望する旧アドレスと変更後の新アドレスを改めてご連絡いただきますようお願いいたします。会計幹事宛へのご連絡だけでは変更されませんので、ご注意ください。

また、新たにメーリングリストへのご参加を希望される方におかれましては、下記、ホームページ担当宛、お申し込み下さい。

皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

メーリングリストへのメールアドレス変更の届出先、新規登録の依頼先

〒700-0005

岡山県岡山市北区理大町 1-1

岡山理科大学 生物地球学部 生物地球学科

日本植物分類学会 ホームページ担当 矢野 興一

e-mail: hp@e-jsps.com

住所・所属等の変更届出先

〒710-0046

岡山県倉敷市中央2-20-1 岡山大学 資源植物科学研究所

日本植物分類学会 会計担当 池田 啓

Phone: 086-424-1661; Fax: 086-434-1249

e-mail: kaikei@e-jsps.com

書評

化石の植物学 時空を旅する自然史

西田 治文 / 著 東京大学出版会 / 発行 ISBN : 978-4-13-060251-8

定価 : 5,184 円 (本体価格 : 4,800 円+税) A5 判 308 ページ

植物化石についてここまでまとめられた日本語の書籍は初めてだろう。化石なくしては、植物の進化も、過去の植物の姿も実証しえない。それゆえ古植物学は重要だが、分類、形態をはじめさまざまな分野が入り混じる古植物学は簡単に学べない。そのような中でここまでレビューされたこの本は、個人的には待望の1冊だ。

内容は、化石の基本、古植物学の変遷など、基礎的な部分からはじまり、陸上植物の各分類群について解説されている。後半は最新の化石研究とエボデボ研究が混在しながら解説されているのでたいへん面白い。内容が内容だけに難解な点もある。だが丁寧に記述され図も多用されており、また少しくらい読み飛ばしても読み進められる構成になっているので、興味あるところだけをひろい読みすることもできる。化石を含めた独自の分類体系や、定評ある書籍やウェブサイトが紹介されているところも有益だ。研究者にとってもアマチュアにとってもオススメの1冊である。



ツツジ・シャクナゲ ハンドブック

渡辺洋一・高橋修 / 著 文一総合出版 / 発行

ISBN : 978-4-8299-8138-2

定価 : 1,512 円 (本体価格 : 1,400 円+税) B40 判 108 ページ

野外にもっていくにはたいへん便利な手頃サイズのハンドブックシリーズの日本のツツジ属バージョン。ツツジの解説されている図鑑は数多あるが、こちらはハンディながらも、内容もたいへん充実している。日本のツツジ属の野生種をほぼ網羅し、各種の生態写真、花の拡大写真、分布図も掲載されている。初心者向けの簡単な検索表もある。また、生態写真ではわかりにくい葉の様子については、葉の拡大写真だけが別ページでまとめられていて、こちらもとてもわかりやすく、花がないシーズンの同定の手がかりになる。春～初夏に登山される方、野生のツツジを見る機会が多い方にとって、山で見かけるツツジの種類がわかる便利な本であることは間違いないだろう。今年は花の盛りは過ぎてしまったが、来年のシーズンにはぜひお供にしたい1冊である。



(堤 千絵, 国立科学博物館植物研究部)

